

スリランカ

なか 中 村 尚 司

日本におけるスリランカ地域研究の主流は、引き続き経済協力に関連する分野である。日本がスリランカに対する最大の援助供与国であるばかりでなく、年々その比重を高めている事態と照応している。経済協力に関連する調査研究の多くは、政府機関やその委託を受けたコンサルタント企業によって実施されるので、研究費の大半は納税者が負担している。しかし、報告書の大半は非公開である。公開される場合でも、東京以外の地方の図書館などには届かない。首都に住む限られた人たちだけに享受される調査研究の成果である。情報の公開が東京だけでなく、日本の各地で求められている分野である。

近年の特徴として、スリランカでは日本の経済協力案件である空港道路建設などをめぐり、反対する運動が表面化しつつあるが、日本国内でも批判的な研究が注目を浴びようになってきた。鷺見 [1992] によるサマナラウエワ・ダム建設問題、中村 [1988 a] によるセイロン海運公社への借款の批判的考察がその例である。スリランカの開発戦略と構造調整政策については、絵所 [1990] がその問題点を解明している。中村尚司は、1994年にスリランカ経済学会年次総会のゲスト・スピーカーとして報告を求められ、経済開発政策について論評を行なった(中村 [1994])。開発が女性の暮らしに及ぼす影

響については、谷口 [1988] が紅茶工場や陶磁器製造工場の女性労働者の就業条件や生活実態を取り上げ、詳細な研究を行なっている。

農業研究の分野は直接的にも間接的にも、経済協力事業とのつながりがあり、多くの研究がなされている。菊池眞夫、佐野幸規の共著『スリランカの農業——現状と開発の課題』は、その代表的な業績である(菊池・佐野 [1993])。浜屋 [1992] は『農業技術』にスリランカの植物資源の歴史を連載している。菊池 [1991] がまとめた灌漑農業研究、中村 [1988 b] がまとめた農業水利史研究は、方法的な立場は異なるがともにシンハラ農村調査に基づくフィールド・ワークの成果である。

経済協力に次いで多くの研究がなされたのは、文化人類学的な分野である。杉本良男が編集した入門書(杉本編 [1987])の執筆者リストは、その傾向を如実に物語っている。人類学的な研究のなかでも特筆すべきは、千葉編 [1988] を中心にスリランカを舞台にして、法人類学という新しい研究分野が切り開かれたことである。まわりを海に囲まれた島国という事情から、人類学的な調査のもうひとつの流れは、田中雅一 [1991]、高桑 [1989] などに代表される漁村、漁民、港町の研究である。漁民の島々からなるマルディヴ社会を描いた岡村 [1986] も、この

流れに加えることができよう。

代表的な漁港でもあるゴール市の肖像を描いた友杉 [1990] は、都市研究のあり方を教えてくれる作品である。長年コロombo市におけるスラムの居住条件を改良する課題に取り組んでいた穂坂 [1994] は、都市問題の重要な側面の報告である。

これとは対照的に、主として内陸部のシンハラ村落調査に基づき、農村社会における労働慣行を研究した足立 [1989]、村祭りの芝居を取り上げた渋谷 [1988]、民間療法の一部でもある悪魔祓いを論じた土田 [1990] など、漁村研究に匹敵する優れた成果を上げている。シンハラ村落研究の活況とは裏腹に、1983年8月以来内戦が激化し、タミル村落やムスリム村落における実態調査が困難になっているのはさびしい。

他方、民族問題という視点から、北部州と東部州における分離独立運動や民族対立の泥沼化も注目され、多くのスリランカ研究者が、さまざまな角度から論じている。なかでも田中雅一 [1994] は、この問題の全体像を把握する上で、非常に優れた概説である。田中典子 [1993] は、住み込んでいた漁村社会において少数民族のタミル人女性が、激化する民族対立のもとでどのような暮らしをしているかを活写している。この分野では、従来からこのテーマの動向分析を行ってきた藤井正夫や中村尚司に加えて、林 [1994]、荒井 [1991] などの論文に見られるように若手研究者が登場しており、将来が期待されている。

スリランカでは世界でも珍しく、海外に送り出される女性の出稼ぎ労働者数が男性のそれよりも圧倒的に多い。1980年代末には日本の過疎

農村における後継者対策として、シンハラ人花嫁を集团的に来日させた事業もある。青年海外協力隊員としての経験をもとに、海外出稼ぎ労働の事情をまとめたのが、内藤 [1990] である。その逆に中村編 [1994] は、日本から進出した企業側から見たスリランカ国内の労働事情を紹介している。

第2次世界大戦後の日本とスリランカとの文化交流の歴史を振り返ると、1950年代にセイロン大学の構内で進められた仏教百科事典の編纂事業に日本の代表的な仏教学研究者が継続的に参加するなど、仏教の果たしてきた役割は大きい。この事業に参加した経験のある森祖道の仕事（森 [1984]）は、スリランカに伝えられた資料に基づく、仏教研究の代表的な成果である。1980年代から日本の仏教団体が再びスリランカに対する関心を復活させ、さまざまな形態で交流活動が進められている。その流れに沿って、仏教美術の入門書も刊行された（伊東 [1993]）。

戦前から仏教を通じての交流を持続的に行ってきたのは日本山妙法寺であり、その活動は『サルヴォーダヤ』誌の各号に紹介されている。最近は学術的な交流よりも、民間公益団体としての市民的な協力活動の方が盛んである。仏教団体以外にも、日本の各地にスリランカとの交流団体が生まれ、それらの機関紙であるミニコミ誌やニューズレターが刊行されている。また、アムネスティ・インターナショナル日本支部やNCCキリスト教アジア資料センターのように、スリランカの人権問題を憂慮し、その状況を継続的に機関紙で伝えている団体もある。

そのような時代的な背景を受けてか、スリランカの代表的な NGO であり、仏教の理念を活動の指針とするサルヴォーダヤ運動に対する関

心が、日本でも高まってきた。運動の指導者であるA・T・アーリヤラトナの著作 (Ariyaratne [1985 (1990)]) やその伝記 (Liyanaage [1985 (1992)]), 研究書 (Macy [1991 (1993)]) などの翻訳書が刊行されている。

このようなスリランカ社会や NGO の活動に対する関心の深まりとともに、スリランカの公用語であるシンハラ語を学ぼうとする人びとも増えた。長年にわたってシンハラ語の紹介と普及に力を尽くしてきた野口忠司の編纂による『シンハラ語辞典』が刊行されたのは (野口 [1992]), 1990年代初頭の快挙である。この辞書を手がかりにして、日本におけるスリランカ研究がさらに深まることを期待したい。

『シンハラ語辞典』の刊行と対応して、現代シンハラ文学の旗手であるE・サラッチャンドラの代表的な作品2つ (Sarachchandra [1959 (1993), 1971 (1991)]) が、相次いで翻訳され刊行された。これはトヨタ財団の「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成によるものであり、今後もマーティン・ヴィクラマシンハやアヌラ・ヴィジャヤラトナ・マニケなどの優れたスリランカ文学の翻訳出版が予定されている。

17世紀にキャンディ王国で20年に及ぶ虜囚生活を送ったイギリス東インド会社の船員の『セイロン島誌』も翻訳された (Knox [1681 (1994)]). 農林省熱帯農業研究センターの在外研究員として、2年間スリランカに滞在したことのある浜屋悦次の訳業である。シンハラ語ではないが、古い英語で書かれた第一級の史料であり、デフォーの小説『ロビンソン・クルーソーの冒険』の種本として有名だが、日本では読まれることが少なかった。植民地支配以前のシンハラ社会を知る上で、貴重な文献である。他の翻訳とし

ては、研究者と研究対象の関係について人類学の方法に再検討を迫る、G・オベセーカラの『メドゥーサの髪——エクスタシーと文化の創造』 (Obeyesekere [1981 (1988)]) と、スリランカの経済地理をまとめたB・L・C・ジョンソンの『南アジアの国土と経済 第4巻 スリランカ』 (Johnson; Scrivenor [1981 (1987)]) が今期の主要な成果である。

日本に留学してきたスリランカ人研究者が、日本に在留を続け研究成果を発表する事例が増えている。ピヤダーサ・ラトナーヤカの場合、スリランカの農村開発について、日本の大学へ提出した博士論文をスリランカの出版社から刊行している (Ratnayake [1992])。今後、このような形で日本のスリランカ研究が進展すれば、しだいに国境の壁で区切れなくなるものと思われる。

以上のようにスリランカ地域研究の大きな流れを回顧すると、近い将来における展望も、日本政府や国際機関による経済協力に関連する調査研究と、広い意味での民族問題が中心にならざるをえないようである。その一方で、地域研究の担い手は増え、研究も深まりつつある。大学や研究機関に属さない若い世代が、スリランカにおける長期的な滞在の体験を活かし、シンハラ社会やタミル社会の研究に取り組む民間学や民際学の開花が期待できる。青年海外協力隊やNGO団体などから派遣されて、シンハラ語やタミル語に習熟するとともに、スリランカ社会の表面的な観察ではなく民衆の思考様式を共有できる、アカデミー外の人びとの層が厚くなっているからである。

〔文献リスト〕

- 足立 明
1989 「シンハラ農村の労働交換体系」『国立民族学博物館研究報告』13(3) 1989.1: 517-581.
- 荒井悦代
1991 「ブレマダーサ人気に支えられた地方選挙」『アジアトレンド』(55) 1991.9: 19-24.
- 伊東照司
1993 『スリランカ仏教美術入門』雄山閣.
- 上田紀行
1990 『スリランカの悪魔祓い——イメージと癒しのコスモロジー』徳間書店.
- 絵所秀紀
1990 「スリランカ型開発戦略と構造調整プログラム」『経済志林』[法政大学] 58(1・2) 1990.10: 395-432.
- 岡村 隆
1986 『モルディブ漂流』筑摩書房.
- 菊池眞夫
1991 「アジア開発途上国灌漑部門における建設局面の終焉と今後の展開方向——スリランカの灌漑投資の動向分析から」『農業総合研究』45(4) 1991.10: 1-74.
- 菊池眞夫・佐野幸規
1993 『スリランカの農業——現状と開発の課題』国際農林業協力協会.
- 渋谷利雄
1988 『祭りと社会変動——スリランカの儀礼劇と民族紛争』同文館.
- 杉本良男編
1987 『もっと知りたいスリランカ』弘文堂.
- 高桑史子
1989 「アペー・パンサラ(われわれの寺)——スリランカ南部漁村における寺院の役割と機能」『明治大学社会科学会年報』(3) 1989: 61-74.
- 田中典子
1993 『消されたポットゥ——スリランカ少数民族の女たち』農山漁村文化協会.
- 田中雅一
1994 「スリランカの民族紛争——その背景と解釈」岡本幸治・木村雅昭編著『紛争地域現代史3 南アジア』同文館: 267-295.
- 1991 *Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
- 谷口佳子
1988 「女性の地位——伝統と変容」千葉編 [1988]: 341-395.
- 千葉正士編
1988 『スリランカの多元的法体制——西欧法の移植と固有法の対応』成文堂.
- 友杉 孝
1990 『スリランカ・ゴールの肖像——南アジア地方都市の社会史』同文館.
- 内藤俊雄
1990 『イスル・ソヤ——スリランカの海外出稼ぎ事情』同文館.
- 中村尚司
1994 “Sri Lankan Economy as Seen by an Unorthodox Economist.” *Upanathi: The Journal of the Sri Lankan Association of Economists* 6(1/2) 1994.8: 113-131.
- 1988 a 「第三世界の海運業と外国援助——セイロン海運公社の事例研究」『東洋文化研究所紀要』[東京大学] (105) 1988.2: 29-71.
- 1988 b 『スリランカ水利研究序説——灌漑農業の史的考察』論創社.
- 中村尚司編
1994 『海外職業訓練ハンドブック: スリランカ』海外職業訓練協会.
- 野口忠司

- 1992 『シンハラ語辞典』 大学書林。
 浜屋悦次
 1992 「スリランカの歴史と植物資源」 1-9 『農業技術』 47(4)-(12) 1992.4 12.
- 林 明
 1994 「スリランカの民族紛争とインド」 辛島昇編 『ドラヴィダの世界』 東京大学出版会：442-454.
- 穂坂光彦
 1994 『アジアの街、わたしの住まい』 明石書店。
- 森 祖道
 1984 『パーリ仏教註釈文献の研究 ― アッタカターの上座部的様相』 山喜房仏書林。
- 鷺見一夫
 1992 「ODA・手抜きが招いた水漏れ欠陥ダム― スリランカのサマナラウエワ・ダム」 『エコノミスト』 71(1) 1992.12：98-102.
- Ariyaratne, A.T.
 1985(1990) *Collected Works*, 3 vols. Moratuwa: Sarvodaya Shramadana. (『東洋の呼び声 ― 広がるサルボダヤ運動』 山下邦明・林千根・長井治訳 はる書房)
- Johnson, B.L.C.; Scrivenor, M. Le M.
 1981(1987) *Sri Lanka: Land, People and Economy*. London: Heinemann Educational Books. (『南アジアの国土と経済 第4巻 スリランカ』 山中一郎他訳 三宮書店)
- Knox, Robert
 1881(1994) *An Historical Relation of the Island Ceylon*. London. (『セイロン島誌』 浜屋悦次訳 平凡社)
- Liyanage, Gunadasa
 1985(1992) *Revolution under the Breadfruit Tree: The Story of Shramadana Sarvodaya Movement and Its Father Dr. A.T. Ariyaratne*. Nugegoda: Sinha Publishers. (『アリアヤトネの道 ― パンの木の下からの出発』 道家祐元・上坂元一・人沢世論時報社)
- Macy, Joanna
 1991(1993) *World as Lover, World as Self*. Berkeley: Parallax Press. (『世界は恋人世界はわたし』 星川淳訳 筑摩書房)
- Obeyesekere, Gananath
 1981(1988) *Medusa's Hair: An Essay on Personal Symbols and Religious Experience*. Chicago: University of Chicago. (『メドゥーサの髪 ― エクスタシーと文化の創造』 渋谷利雄訳 言叢社)
- Ratnayake, Piyadasa
 1992 *Towards Self-reliant Rural Development: A Policy Experiment in Sri Lanka*. Colombo: Karunaratne & Sons.
- Sarachchandra, Ediriwira
 1971(1991) *Heta Echchara Kaluwarā Nae*. Colombo: Lake House. (『明日はそんなに暗くない』 中村禮子；パドマ・ラタナーヤカ訳 南雲堂)
- 1959(1993) *Malagiya Aetto & Malavunge Avuridu Da*. Colombo: Lake House. (『亡き人』 野口忠司訳 南雲堂)
- (龍谷大学経済学部教授)